

## 「帝国」の大学に学んだ朝鮮人学生

永島, 広紀  
九州大学韓国研究センター : 教授

<https://doi.org/10.15017/4797811>

---

出版情報 : 韓国研究センター年報. 22, pp.71-85, 2022-03-25. Research Center for Korean Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

# 「帝国」の大学に学んだ朝鮮人学生

永島 広紀\*

## はじめに

筆者は旧稿<sup>1)</sup>の結びの部分で次のように述べたことがある。

そもそも「大日本帝国」は朝鮮人学徒に何を求め、そして何を奪い、何を与えたか？ 一方で、朝鮮人学徒は何の見返りを求めたのか？

かくなる自問を行い、そして「有力な答えのひとつが『学歴』である」と自答しているのであった。くだんの旧稿は主として1943年秋以降、高等教育機関に在籍する文科系学徒の「在学中における徴兵猶予の停止」、すなわち「学徒出陣（学徒兵・学兵）」と呼ばれる事象群の中、いまだ徴兵の対象ではなかった朝鮮人学徒の「臨時募集陸軍特別志願兵」への応募の状況を、まずはその送り出し元の学校側の学事記録によって復元せんとする内容のものであった。

また同論文でも述べたように、それは「親日派」の探索や断罪ではなく、ましてや「愛国者（この場合は主に徴兵忌避者のこと）」の認定作業でもなかった。ただ、愚直なまでに近代の朝鮮社会における「学歴」の形成とその時期的な推移とを踏えた上で、朝鮮人「学徒出陣」の姿をひたすらに追い求めようとしたのであった。

そして今回、本稿が目指すのは、そうした学業半

ばにしての応召を余儀なくされた者たちを含む、確認しうる限りにおいて帝国大学に、ないしはそれに準じる大学において学んだ全ての朝鮮人学生をリストアップの対象にすることである。ただし、さしあたって学部入学者に限り、選科の入学者でも本科への編入が確認される場合は、ここに加えている。ただし、紙幅の関係から京城帝大の分は除くことにした。

特に、医学部には「専攻生」などの身分でもって医学専門学校出身（すなわち「非」医学士）の医師たちが各「教室」に分属し、学位論文の準備のために数多く在籍していたものの、今回のリストからは除いてある。また、戦時期の帝大医学部と官立医大には「臨時医学専門部」が併置され、中等学校卒業者をその入学対象者としていた。この臨時医専部にも少なからざる外地出身者の名前が確認できるが、あくまでも専門学校相当の教育機関であることから本稿のリストには加えなかった。薬学専門部・工業専門部・教員養成所などの付置教育施設に関しても同様である。その代わりに、学士の称号を名乗る資格はないものの、論文の提出による請求を行うことによって博士の学位を得た者たちについては、その学位論文名とともに別途に一覧を作成した。

## 調査の背景と意図

筆者は年来、戦前期（戦後の旧制を含む）の高等教育機関に入学し、そして卒業していった朝鮮半島出身者の数的動向に関する悉皆調査を実施してきている。また、近年はさらにその範囲を台湾や満洲国

\*九州大学韓国研究センター教授

1) 拙稿「朝鮮人の帝国大学進学と『学徒出陣』」（須川英徳編『韓国・朝鮮史への新たな視座』勉誠出版、2017年5月、同書268頁）。

(関東州を含む)にも抜けつつある。その一環として、満洲国「間島」出身にして、「(朝) 鮮系」として同国からの「留学生」として渡日した者たちも、今回の一覧に含めている。満洲国の「日本人(朝鮮人・台湾人を含む)」向けの中高等学校は「在外指定学校」として、「満洲国に於ける治外法権の撤廃及南満洲鉄道附属地行政権の移譲に関する日本国満洲国間条約」(1937年12月)の締結によって日本の満洲国における治外法権が撤廃されたことに伴い、関係法令が全面改正される1940年4月以前においては文部省・外務省、それ以降においては満洲国駐劄特命全権大使が掌理し関東局・在満教務部(元の在満大使館教務部)の管轄下に置かれた中高等学校(中学校・高等女学校・各種実業学校)と、さらに関東局の所属官署である関東州庁の所管(つまり遼東半島の旅順・大連など旧関東都督府・関東庁の施政区域)たる中高等学校が混在・並存していた。さらに朝鮮人子弟の場合、満洲国民生部の管轄に属する中高等学校(国民高等学校など)に進むことも多かった。

例えば、間島・龍井に出生し、新京商業学校(在外指定学校)を卒業する史学者の全海宗(1919-2018)は、「内地人」同様の資格でもって京都の三高(文科乙類)に入学し、さらに東京帝大法学部政治学科に進学する(1943年10月)。しかし、卒業期を迎えることなく1946年初には米軍政下の「京城大学」法文学部(おそらく2年次)に編入し、最終的には「ソウル大学校」文理科大学・史学科を翌1947年7月に卒業するという、まさしく帝国日本の領域が拡大し縮小する時流に翻弄されつつも、決して途切れることもなかった「学歴」を有している。

ともあれ、収録の対象機関としたのは「帝国大学」の中で、朝鮮半島に置かれた京城帝国大学を除く8校、および帝大に準じる官公立大、すなわち学部卒業時に「学士」の称号を付与し、教授会が博士学位の授与権を有した6官立医大、2文理科大学、3商大、および東京工業大である。

さらに、あくまでも満洲国の国务院直轄であり、在満教務部ですらその権限が及ばなかったものの、日本内地・外地(朝鮮・台湾)の中高等学校からも入学者を選抜<sup>2)</sup>しており、その結果、相当な数の朝鮮

人入学者が確認される「建国大学」も帝大に準じて一覧に加えることにした。

なお、ここで京城帝大を除いた理由は、いわゆる「内地渡航」を伴わず、あるいは少なくとも朝鮮人に関しては「帝国」の各法域(台湾・関東州、さらには満洲国)を跨ぐ移動を伴い難いこと<sup>3)</sup>、そして何よりも人員的にかなりの数に上ることから、さしあたり本稿では収録の対象から控除した。京城帝大の学生におけるその数的な動向に関しては別稿を準備中である。

また、1940年に予科が開学し、1945年9月に最初の本科学業生を出した神宮皇学館大学(法学士・文学士)には朝鮮人学生の在籍が確認されなかった<sup>4)</sup>。さらに、少なからざる朝鮮人学生の在籍が断片的な資料から窺えるものの、京都府立医科大学(医学士)、関東局学務課が所管する旅順工科大学(工学士)、そして非官立ながらも共に勅令で設置された奉天の満洲医科大学(医学士)と上海の東亜同文書院大学(商学士)に関しては通時的なデータ収集が未了のため、今回の一覧に加えることが叶わなかった。その他の私立大学(旧制)や専門学校とともに、これまた他日を期したい。

\*

そもそも、このことに関心を抱いた直接のきっかけは、かつて白川豊・九州産業大学教授(当時、現・名誉教授)による、戦前期の文壇でその名を知らしめた朝鮮人作家である「金史良」の旧制高校時代にまつわる佐賀大学での学籍簿調査(1999年12月14日)に同行させていただいたことにあった。金史良(金時昌)は佐賀高等学校文科乙類に入学し、さらに東

2) ただし、「中学4修」での入学が認められない代わりに「前期(旧制高校相当)」の2年次に編入された。その一方で満洲国の学校を卒業して前期1年次に入学する朝鮮系生徒も存在した。

3) もちろん、内地や満洲の中高等学校を経て予科に入学することはあり、稀に内地の旧制高校から学部に進学する例も存在し、さらには台湾人が旧制高校を経て京城帝大医学部に進学している例も確認できる。

4) 大学昇格以前の神宮皇学館時代(官立専門学校相当)に中退者が一人だけ確認される。

京帝国大学文学部独逸文学科に進学（卒業後に大学院にも在籍）した作家である。白川氏は旧制佐高同窓会（菊葉同窓会）が保管していた「身上調査書」を元に、金史良こと金時昌の佐賀時代に関する本格的な考証<sup>5)</sup>をすでに終えられており、その時の調査自体は落穂拾い的なものではあった。

しかし、ここで筆者にとって素朴な疑問として浮かび上がってきたのが、「そもそも旧制佐高にはどのくらいの朝鮮人生徒が在籍していたのか？」ということであった。そこでまずは佐賀大学附属図書館に配架されている各年度版の『佐賀高等學校一覽』をはじめとする関係資料にあたって概数の把握に努めた。その結果、1920年春の開校から1950年3月の廃止までの時期に、相当数の入学者／卒業生（中退者）が存在していたことが浮かび上がってきた。さらに、大学記念誌編纂の過程<sup>6)</sup>で、佐賀大学が保管する旧制時代の学籍簿や除籍簿での全数確認が可能となり、戦時末期に入学し、卒業することなく戦後に除籍処分となった者たちの数も判明することになった。しかも、平壤府・平安南道を中心とするいわゆる「西北」人<sup>7)</sup>たちの数が突出していたことに一驚することになる。金時昌（金史良）も、その兄・時明とともに平壤高等普通学校の出身（ただし金史良は「中学4修」の資格を有する中退者）であった。

ただし、この数が相対的に多いのか少ないのかは依然として不明であった。そこでまずは近隣県の旧制高校（福岡高・五高・七高造士館）から逐次に調査を開始した。とりわけ高等学校卒業生の場合は、その大多数がさらに各地の帝国大学や官立医大に進学していることが確認出来ることから、これを日本全国（台北・旅順を含む）の旧制高校を対象とする調査へと順次に拡大させていった。その結果、山口

高を筆頭として、三高（京都）・佐賀高・松山高（愛媛）・六高（岡山）・松江高（島根）の順で西日本の旧制高校に入学した者が多かったこととともに、東北地方の山形高にもこれらに次ぐ規模の入学／卒業生が存在したことが明らかになった。

山形高の場合、1920年代中盤から1930年代の前半に入学者が集中しており、しかも内地の中学校出身者が少ない。朝鮮総督府学務局（朝鮮教育会奨学部／朝鮮奨学会）の斡旋を受けて事実上の「留学生」として待遇されていたのである。そして、30年代後半以降はしばらく入学者が途切れ、戦時末期に少数ながらも復活していることから、まさに斎藤実総督期の「文化政治」の賜物であった。また、その卒業生の多くが東京を避けて京都帝大に向っていることから、そこには意図的な「配慮」、つまるところ「監視の眼」があったと言えよう。そして、内地の中学校と朝鮮の高等普通学校の卒業生が、純粋に高校入試の点数を争う状況に移行<sup>8)</sup>していったのである。

ところで、当該の調査にあたってはまず「官立」の旧制高等教育機関を中心とする状況把握に努めた。その理由の一つとしては、朝鮮人「留学生」たちが大挙押しかけた在京の学校のみならず、北は北海道から南は鹿児島まで、まさに地方色が全面に出る諸学校に満遍なく在籍していたことが挙げられる。旧制高校（大学予科）に限れば、台北と甲南（兵庫）を除く全ての学校に朝鮮人の在籍が確認された。大都市以外の地方における高等教育を支えたのは、やはり官立の学校であった。

## 調査方法について

調査の手法についても、その梗概をここで述べておきたい。まず、最も重要かつ基礎的な史料としては各学校が原則として毎年度発行していた『一覽』

5) 白川豊「佐賀高等学校時代の金史良」（『朝鮮学報』147、1992年4月／のち『植民地期 朝鮮の作家と日本』大学教育出版、1995年7月に収録）。

6) 『佐賀大学の物語』（佐賀大学統合10周年記念誌編集委員会、2014年9月、<http://www.saga-u.ac.jp/koho/monogatari.pdf>）。

7) 本来、咸鏡道ならば「閔北人」、咸鏡南道から江原道北部にかけては「閔東人」、さらにその南は「嶺東人」などと厳密に区分すべきであるが、煩雑を避けるため、本稿では「以北五道」出身者を敢えて「西北人」に一括した。

8) 註1に掲げた旧稿（2017）でも紹介した通り、弘前大学に残る旧制弘前高の教務関係資料中、1939年に起案された文書として、朝鮮奨学会からの斡旋に対して、これを拒絶して通常の入試を突破することを求める返答がなされているものが残されている。



(もしくは『要覧』)の類が挙げられる。これに掲載される生徒名簿こそが人名データを構築する際の核となる。この史料においては毎年入学してくる生徒の原籍地と出身校が併記されていることが多い。稀に、朝鮮人の場合は出身道、台湾人の場合は出身州が記載されることもある。

進学先の情報に関しては各高校『一覧』の卒業生欄に掲載されることもあるが、基本的には同じく原籍地が併記されている各大学の『一覧』から入学者を拾って「名寄せ」する必要がある。ただし、大学の『一覧』からではほぼ出身校を割り出すことは出来ない。なお、東京・京都の両帝大に関してはそれぞれの「帝国大学新聞」に入学者の姓名とともに出身校名が併載されていることが多く(おおむね1920年代初頭～1943年10月入学期まで)、貴重な情報源となっている。さらに各高校の同窓会名簿にも進学先が記されることが多いものの、誤記載もままたり注意が必要である。

こうした作業の繰り返しによって、まずは「積み上げ式」のリストを作成することが可能となり、中退者や留年者の数を把握することも割合に容易である。この点、本稿は鄭鍾賢氏の『帝国大学の朝鮮人』(慶應義塾大学出版会、2021年3月、原題:『제국대학의 조선정』 휴머니스트、2019年6月)とは対称的な手法をとっていると言える。同書には、外国人が容易にアクセスしづらいエピソード(特に親族や閨閥に関する話題)も満載されており、韓国側の研究水準を一気に引き上げた画期的な一書である。

しかし、基本的に卒業生の積算を基礎とするデータ構築の方法が採られており、筆者である鄭氏自身も同書巻末に掲載された「東京帝国大学・京都帝国大学 朝鮮人学生名簿」に関しては、「京都帝大のリストと比較して、東京帝大の卒業生名簿の内容には欠落が多い」(同書・付録12頁の「凡例」と述べるように、京都帝大以外の部分は遺漏が多い。また、その京都帝大にしても戦時期の入学者をほとんど含んでいない。

また、東京・京都両帝大の文系(特に「法」)に関心が集中し、その分、理科系学部、あるいは他の帝大への視点は薄く、言及も少ない。さらに、「正

系(=高等学校からの進学)」と「傍系(=専門学校からの進学)」の区別や、「学士入学」といった入学資格面での制度的な理解が不十分であるのが惜しまれる。そのため、「九州帝大予科」(同書47頁)などという、およそ存在することのない教育組織が登場することになっているのである。これは入学者の前歴に「九州帝大」等とある場合、それを学士入学であるとは思わず、「予科」から別の帝大に進学したと見なしたからであると思われる。

\*

おおむね1942年頃から、おそらく用紙不足を主たる原因として『一覧』を作成していない学校が増え始める。よって、戦時末期の入学者に関しては『一覧』を用いた情報収集が出来なくなることが増えていく。それでも、学籍関係の記録が「特定歴史公文書」として指定されている大学の場合には、開示手続きによって閲覧が可能な場合もあるが、ほとんどの大学では個人情報保護の立場から学籍簿は非公開である。

ちなみに、旧7帝大と旧文理大の広島(おのおの旧制高校/大学予科を包括)、および旧官立医大に旧制高校(ナンバースクール)が包括された金沢と熊本に関しては独自の大学アーカイヴ施設を有しており、関係資料の整理と公開が進んでいる。六高に関しては校地を継承する県立岡山朝日高校内に同窓会が作った記念館がある。七高造士館の関係資料は戦災で焼失したと伝えられる。

一方、弘前・新潟・富山・島根(松江高)・高知では辛うじて附属図書館に關係資料が保管されており、静岡大は人文社会科学部の部内措置で旧制静岡高資料を整理・保管している。旧制姫路高の資料は同窓会の委託により、校地を継承した兵庫県立大(姫路環境人間キャンパス)によって今となっては全国的にも残存が希少となった木造校舎とともに管理されている。また旧制松本高の資料をはじめ、各高校同窓会・個人からの寄贈資料を長野県松本市の「旧制高等学校記念館」が整理して閲覧に供している。また、学習院や私立の旧七年制高校(武蔵・成蹊・成城・甲南)はさすがに記念館をはじめとする校史

顕彰施設を保有している。さらに国外では台北高の記念室が校地と建物を継承した台湾師範大学にあり、台湾大学にも台北帝大・同予科時代を回顧する複数の記念施設がある。

ともあれ、戦時末期の入学者を突きとめる次善の策としては、各地方紙に掲載される「合格者」の一覧記事を集めることが一計となる。おおむね1943年度入試（1943年3月）あたりまでは原籍地や、もしくは出身校とともに氏名・姓名が紙面で確認できることが多い。物資の統制が厳しくなり、新聞紙の頁数が減らされる1944年度・1945年度ともなると、おおむね合格者名だけの記載となることが増え、しかも「創氏」「改姓」の関係で外地出身者であるかどうか判然としないケースが多発することになる<sup>9)</sup>。

もちろん、各校の同窓会名簿も二次的であるとは言えども貴重な情報源である。しかし、同窓会はあくまでも卒業生ベースの親睦団体である。とりわけ戦時最末期に入学し、学徒出陣などで学窓を去り、戦後も日本に戻ってくるのがほぼなかった旧外地出身者は、よくて「消息不明者」として記録されるのみである。1945年4月入学組に至っては、学校間の書類のやり取りだけ合否が決まり、連絡航路の途絶により内地渡航そのものが不可能となっていたケースも少なくない。

しかしながら、大学卒業期が1945年9月であるとして、そこから遡及して1942年10月の大学入学、1942年9月の高等学校・専門学校繰り上げ卒業、1940年4月の高等学校・専門学校入学、そして1940年3月に中等学校を卒業した者たちを上限として、それ以前の世代は、おおむね上記の『一覧』にてその数的な動向が通時的に把握しやすい。

しかも、1940年4月までに高等学校や専門学校に入学した者までであれば、朝鮮人の場合は「創氏改名」以前の姓名で名前が記載されていることが多く、

9) その一方、1965年以降は本格的に個人ベースの連絡が復活し、日本国内で開催される同窓会に韓国人卒業生が招かれることは珍しくなかった。韓国人にとっても格別な意味を持ちえた「寮歌」「ストーム」といった旧制高校カルチャーが朝鮮半島の社会にどのように受容されたか（否か）は、別途に考察すべき課題である。

戦後（解放後）の人名録などとの対照作業が行いやすい。逆に1941年4月入学者以降になると創氏名だけが最初から記載され、旧姓名が判明しないケースが頻発することになる。なお、本稿は「創氏名」と言えども一つの歴史的な存在であり、特定人物を指し示す「符牒」の類であるとの立場・視点から、可能な限り後掲のリストには掲載することに努めた。

## 暫定的な集計と若干の考察

各帝大・官公立大において学士の称号を受けた者、あるいは中退者・除籍者・転学者までを含む学部入学者の数を学部（学士）の別で集計したのが【表1】である。もとより不完全なものであり、今後とも情報の補完と補正を行っていかねばならないことは言うまでもない。以下、あくまでも暫定的な集計に基づく考察であることを、まずはお断りしておきたい。

まずは、やはり法学部（法文学部の法科）の数が最も多いところに注目される。科挙応試の伝統から朝鮮人学徒が法科を選好したという説明がしばしばなされる。確かに後掲の一覧にも併記しているように、帝大の法科に入り、文官高等試験（行政科・司法科・外交科）への及第を目指すというコースは、明らかにエリート養成の捷徑であると認識されていたに違いない。もちろん、これは朝鮮人に限ったことではない。ただし朝鮮人高文合格者の場合、戦時の最末期を除いて朝鮮総督府がその主たる就職先とならざるを得なかった。

なお、法科をはじめとする「文系」の数の多さだけに目を奪われてはならない。相当な数の「理系」組も存在していたのである。これは、やはり東京帝大や京都帝大だけを見ていても今ひとつ判然としないことである。特に東北帝大の理学部、北海道・九州両帝大の農学部などは、実学系の専門学校からの「傍系」入学者を多く受け入れた結果、「正系」の学生、すなわち高等学校からでは得難い、多彩な地方色や社会的バックグラウンドを有する人材のリクルートに成功していたのである。なお、京都帝大も農学部に限っては傍系入学を積極的に認めており<sup>10)</sup>、そ

【表1】大学別・学部別の「学士」学生数

	法	医	薬	工	文	理	農	(林)	経	商	その他	(小計)
東京帝国大学	101	8	4	34	64	13	34	1	30			289
京都帝国大学	145	35		35	31	14	35		48			343
東北帝国大学	50	9		6	30	27			8			130
九州帝国大学	87	9		12	15	5	32		13		16	189
北海道帝国大学		2		3		11	25					41
台北帝国大学		1			1	1	2					5
大阪帝国大学		5		8		2						15
名古屋帝国大学		14		3								17
新潟医科大学		6										6
金沢医科大学		8										8
千葉医科大学												
岡山医科大学		2										2
長崎医科大学		9										9
熊本医科大学		21										21
東京文科大学					3	1						4
広島文科大学					1	2					1	4
東京商科大学										68		68
大阪商科大学										11		11
神戸商業大学										3		3
東京工業大学				16								16
(小計)	383	129	4	117	145	76	128	1	99	82	17	1181
建国大学	22				9				16		25	72

## 〔凡例〕

- ・この中には入学はしたものの、卒業に至っていない者が相当に含まれる。
- ・学部の並び順は東京帝国大学の建制順に依った。
- ・「(林)」とあるのは東京帝大農学部（東京農林学校時代を含む）が1886年から1920年まで林学士の称号を出していたことによる。
- ・東京帝大の「工」は「工学部」「第一工学部」「第二工学部」の合算である。
- ・東京帝大経済学部の商業学科は経済学士の称号付与であったことから「経」に算入した。
- ・東北帝大・九州帝大の法文学部では「法」「経済」「文」の3学士、台北帝大の文政学部では「法」「文」の2学士を出しており、それぞれ「法」「経」「文」の項目に分類した。
- ・建国大学は学部制を採らず、学士称号の授与もなかったが、「文教」「政治」「経済」の3学科に分かれていたため、この表の外数としつつ、それぞれ「文」「法」「経」に分類した。
- ・建国大学における「その他」は、所属学科は不明であるものの、1945年4月時点で学部相当の「後期」に進級していたと考えられる朝鮮人生徒の数。

の結果、大学農学部が存在しなかった朝鮮から官立の水原高等農林学校と私立の崇實専門学校（農科）の出身者が大挙して内地の帝大農学部に進学していくルートが開拓されていったのである。

ともかく、東京・京都の両帝大は時期や学部（学科）にもよるが、原則的に旧制高校出身者（いわゆる「正系」）のみを受け入れている。高等学校出身者だけで入学定員を満たすことが可能であったために他ならない。これに対して、北海道・東北・九州・京城・台北・大阪・名古屋の「後発」帝大において

は「傍系」入学者、すなわち各種の専門学校・大学予科・大学専門部等を経た者の受験と入学を認めていた。そして、そこにはごく少数ながらも女子学生が含まれていくことにもなっている<sup>11)</sup>。

なお、北海道・京城・台北の各帝大には旧制高校相当の「予科<sup>12)</sup>」が併置されており、基本的に学部

10) 拙稿「京都帝国大学入学者における『正系』と『傍系』—特に「外地」出身者の入学形態をめぐって—」（『京都大学大学文書館たより』33、2017年10月）。

11) 通堂あゆみ他「京城帝国大学に学んだ女子学生」（『韓国研究センター年報』19、2019年3月）。なお、北海道帝大：理学士1、東北帝大：文学士3、九州帝大：法学士1・文学士2、京城帝大：文学士3、に加えて東京文理大：文学士2、広島文理大：理学士1、の計13名が確認できる。

12) ただし、台北帝大予科の設置は1941年度であり、大学の設置からはかなり年数が経っている。当初は台北高からの進学者が見込まれたものの、医学部以外は他大学に進むことが多く、苦肉の策としての開設であったという。



進学者は予科出身者であることが要求されていた。しかし、医学部を除けば予科出身者で定員を満たすことが難しく、京城帝大の法文学部<sup>13)</sup>と台北帝大の文政学部におけるそれぞれの文科系学科・専攻、北海道帝大の農・理の両学部、台北帝大の理農学部(のち理と農に分離〔1943年〕)と1943年に新設される工学部、同じく1941年に新設された京城帝大の理工学部には「傍系」入学組も少なくなかった<sup>14)</sup>。

\*

また、「積み上げ式」であることから、中退者(除籍者)の動向をかなりの程度で追うことができるというのは既述の通りである。特に1942年10月入学組の場合、文科系の場合は翌1943年秋に陸軍特別志願兵として学徒出陣(入営日は1944年1月20日)を余儀なくされた者も多い。徴兵が猶予された理系においても卒業期である1945年9月を待たず故郷に帰還した者が多い一方、すでに日本内地に生活拠点があったのか、医学部を中心として、そのまま就学を続けた者も散見される。

なお、日本側の大学からすれば、特段に本人が手続きをとらない限りにおいて、おおむね戦後の1947年度末までに学費未納による除籍処分となっている場合がほとんどである。ただ、後掲の一覧を見ていただければ分かるように、1942年10月入学組(医学部の場合は1942年4月入学組)は、米軍政下の「京城大学」に編入が認められ、すぐさま1946年7月に卒業している者が少なくない。そして、1943年10月(医：1942年10月)・1944年10月(医：1943年10月)・1945年4月(医：1944年10月)のそれぞれの入学組

は京城大学(法文・医・理工の各学部)の各学年への編入を経て、1946年秋に設立されるソウル大学校に移籍し、その第1期生(1947年7月)・第2期生(1948年8月)・第3期生(1949年7月)としてそれぞれの卒業期を迎えているのである。また、これは韓国にも3年制の「旧制大学」が存在したことを意味する。

とりわけ、卒業試験の合格こそが医師免許取得の関門である医学部の場合は、なおさらそれが顕著であったことが窺える。一方、帝大をはじめとする日本内外地(満洲国を含む)での就学がおおむねそのまま認定されたことを意味する。卒業後にはすぐさま大学の教員となる者も少なくなかった。まさに「即戦力」ないしはそれに準じる存在として期待されたのである。

よって、本稿のリストの集計に「中退者」等を含めることには、「学歴」というものが生成され、引き継がれていく過程において一定以上の意味があると思われる次第である。

## 西北人・嶺南人・湖南人

【表2】を見れば、やはり数的に最も優勢であるのは最大の人口を誇る京城府を擁する京畿道であることが一目瞭然である。しかし、京畿道には及ばずともこれと拮抗する第二の都市・平壤府を含む平安南道出身者の数には刮目せざるを得ない。朝鮮総督府の統計<sup>15)</sup>によれば、1940年末時点での人口は京畿道の2,834,404人に対して平安南道は1,598,221人であり、およそ100:56の割合である。単純計算ではあるが、京畿道の人口を平安南道の人口で除した1.77という数値を比例係数として用いて132に乗すれば、平安南道は234相当となり、京畿道をかなり上回ることになる。しかも、京城府の学校には平壤府をはじめとする地方各道から「越境」して入学する者が多かったのは、後に見る佐賀高の例からも窺えることである。また、京城においては公立校のみ

13) 京城帝大法文学部の文科は規程上では傍系入学が可能であったものの、実際の例は確認できない。ただし、中等学校卒業の資格をもって「選科」に入学し、単位を取得し卒業論文を提出した上で「予科修了学力検定試験」に合格することによって「文学士」となる者は少なくなかった。また、選科の途中で検定試験に合格して本科に編入されることも増えていった。この点、東北帝大法文学部における「聴講生」(中等学校卒の資格で入学可能、途中で試験を受けて本科に編入することが可能であった)と近似した制度とその運用であった。

14) 拙稿「帝国の外地出身「科学者」たち—京城帝国大学《理工学部》設立のあとさき—」(『広島大学文書館紀要』22、2021年3月)。

15) 『昭和十五年 朝鮮總督府統計年報』(朝鮮總督府、1942年3月)同書2頁。



【表2】各道から内地／外地への進学者数（大学別）

	(満洲・ 間島)	咸鏡北道	咸鏡南道	平安北道	平安南道	黄海道	江原道	京畿道	忠清北道	忠清南道	全羅北道	全羅南道	慶尚北道	慶尚南道
東京帝国大学	3	8	22	23	30	7	4	36	6	5	7	26	25	19
京都帝国大学	1	8	21	24	37	4	3	41	5	11	10	35	22	22
東北帝国大学	4	9	11	15	17	9	4	21	3	4	6	11	5	6
九州帝国大学	3	5	21	16	24	14	1	33	2	10	7	21	14	17
北海道帝国大学	2	2	2	3	6	3		3	1	3		1	2	4
台北帝国大学		1			2		1							
大阪帝国大学			4		1			2				2		1
名古屋帝国大学			2	1		1				1			2	1
新潟医科大学				1							1			1
金沢医科大学				1	1	1		1						2
千葉医科大学														
岡山医科大学										1		1		
長崎医科大学				4	1							2		1
熊本医科大学		1	3		3	3	1			1	1		2	1
東京文理科大学														
広島文理科大学								1				1		
東京商科大学			3	2	4	1		10	2	2	1	3		5
大阪商科大学						1							1	
神戸商業大学		1			1		1						1	
東京工業大学				2	1			2	1	1			1	3
建国大学		14	6	9	3	3	2	10	2	3	2	4	10	7
(小計)	13	49	95	101	132	47	17	160	22	42	35	107	85	89

ならず、普成・徽文・中央・養正・培材といった私立の高等普通学校（中学校）も多くの方出身者の受け入れ先となっていた。一方、その逆、すなわち京城府出身者が他の地方、とりわけ平壤の中等学校へ積極的に進学することは、いささか考えづらい。

\*

そこで、さらに【表3】である。そうした地方出身者の上級学校への進学を担保するのが、各道の中心都市毎に存在した高等普通学校（1938年度からは中学校）である。大韓帝国期の1900年に設立された官立の「中学校」、さらにこれを改編した「官立漢城高等学校」（1906年）にルーツを有する京城高普は、1921年度から「第一」と「第二」に分離され、1938年度からはそれぞれ「京畿中学校」と「景福中学校」となっている。2022年現在、おおむね60代の韓国人が高校を受験した頃までは学校ごとの個別選抜であり、ソウル市内においては京畿・景福、そして日本人中学校の施設を引き継いだソウル（旧：京城中）

と龍山の4校が難関高校として鎬を削っていたという。その後、激化の一途をたどる受験競争を緩和する目的でいわゆる「高校平準化」に踏み切ったあおりを受け、かつての「名門校」は少なくとも大学進学面においては、おしなべて「零落」したという。

それはともあれ、一方で平壤高等普通学校は東亜同文会が平壤に設立した日語学校に淵源を持ち、官立平壤日語学校／官立平壤高等学校の時期を経て設立されている。1938年度からは平壤第二中学校（日本人向けの平壤中が平壤一中となった）となったが、上級学校への進学面においては、まさに京城一高普（京畿中）を猛追する存在であった。

さて、前出の旧制佐賀高等学校は1920年に設立された「第十五高等学校」に数えられる地名スクールの一つであった。同校出身者の特徴の一つは官吏志望者が多かったことであり、多くの行政官・司法官を輩出している。その中で朝鮮人入学者の動向として刮目すべきは「平壤高等普通学校／平壤第二中学校」出身者の多さである。1944年9月までの卒業者

【表3】 主要な中等学校とその進学先

	東京帝大	京都帝大	東北帝大	九州帝大	建国大	(小計)
京城高普 / 京城第一高普 / 京畿中	44	32	14	15	10	115
京城第二高普 / 景福中	13	9	4	5	1	32
平壤高普 / 平壤第二中	21	34	9	7	3	74
新義州高普 / 新義州東中	8	6	2	2	3	21
海州高普 / 海州東中	4		2	4	2	12
咸鏡高普 / 鏡城中	3	8	5	3	2	21
咸興高普 / 咸南中	7	11	3	8	1	30
光州高普 / 光州西中	11	8	6	6		31
大邱高普 / 慶北中	17	10		6	5	38
東萊高普 / 東萊中	5	4	1			10
光明中 / 光明国高 / 龍井第一国高	3	2	3	2	10	20

(中退者含む) 65名中、その数は20名に達する。これに加えて、以北五道の学校、ないしは以北五道出身であることが確認される在京城の中等学校出身者の数は39名を数え、佐高に入学した朝鮮人生徒総数の6割を占める。そして39名中の14名が京都帝国大学に進学し、さらにその中の9名が法学部に入学している。文官高等試験にも行政科3名・司法科3名(うち一人は両方に合格)の延べ6名が合格している。まさに金史良の実兄である金時明もその一人である。

なぜ、これほどまでに「西北人」が佐賀に殺到したのかについて、これを裏付ける明確な資料を見出すことは今のところ難しい。朝鮮半島に近い北部九州地方であることもその理由の一つであろうが、近隣の福岡や熊本には以北五道からの進学者はそれほど多くはない。むしろ熊本の第五高等学校には大邱高普(慶北中)出身者が多く、また光州高普(光州西中)勢もかなり数的に健闘している。

まさしく、「畿内」に対する「西北」「湖南」「嶺南」という、朝鮮半島における伝統的な地域社会の競合と葛藤のあり方を考慮する上ではきわめて暗示的な構図となっている。京城に対する対抗心や忌避感情からも、とりわけ「以北五道」出身者が「内地」の

高等学校・専門学校、そして帝国大学を目指したのではないかというのが筆者の仮説である。また、済州島出身者が京阪神の中学校を経て旧制高校に進学する若干の例を確認できる。多数の済州人が大阪を中心とする関西地方に移住したという。よく知られる史実とも符合する。

斎藤実総督期の1920年に朝鮮教育令が改正(第二次)され、朝鮮内の中等学校出身者は内地の学校に途中編入したり、あるいは専門学校入学者検定(専検)に合格せずとも上級学校の入学試験に応試が可能となった。そして、これは間もなく朝鮮各道の拠点校が「進学名門校」としての新たな属性を具備していくことになる大きな画期でもあったのである。

ちなみに、京畿中(京城一高普)と平壤二中(平壤高普)出身者がそれぞれ東京帝大と京都帝大にどれくらい進学したかをまとめたのが【表4】である。京畿中の出身者が両大学におおむね満遍なく進学しているのに対して、平壤二中出身者は日本各地の高等学校を経て、明らかに「京都」を目指していることが見て取れる。

さらに、戦時末期になって急浮上してくるのが、満洲国の中等学校出身者である。特に間島・龍井の

【表4】 京畿中と平壤二中出身者の東京帝大・京都帝大への進学状況(学部別)

	東京帝大									京都帝大						
	法	医	薬	工	文	理	農	経	法	医	工	文	理	農	経	
京 畿 中	13	2	1	7	8	3	5	1	8	3	4	4	2	3	5	
平 壤 二 中	6	1		4	3	2	1	3	16	5	3	2	2	3	3	

註) 京畿中には京城高普・京城第一高普、平壤二中には平壤高普の数を含む。

光明学園中学部（のち光明国民高等学校、さらに省立に転換され龍井第一国民高等学校となる）は、当初は「在外指定学校」であったにもかかわらず、1938年にはそれが解除され、「内地（および朝鮮・台湾・関東州）」の学制との接続が失われることになった。しかし、第一高等学校の「特設高等科」をはじめとする官立学校に「満洲国留学生」のステータスを有して入学を果たし、さらにそこから各帝大に進む者が増えていったことが確認される。また、光明中は新京の建国大学にも少なからざる卒業生を送り込むことに成功している。

もし、「帝国」日本の中に民族的な出自をあまり問わない次元の人的なネットワークというものがあったとすれば、それはまさに「受験」と「進学」にまつわる人と情報の行き交い、そのものであった。戦時期に至っても、否、戦時期だからこそ人々の移動と異動の流れは、少なくとも1945年3月までは止まることがなかった。関釜連絡船に搭乗して内地へ受験に赴くあまたの朝鮮人学生・生徒の姿とは、1945年3月10日の東京大空襲の直後でも、中学受験のために疎開先から続々と東京に戻る小学生の姿があったというのに重なりを持つ現象と言えようか。そして、同じようなことが台湾、そして満洲でも起こっていたのである。

### 文官高等試験への応募と及第

先に少しく触れたように、朝鮮人学徒たちが帝国大学やこれに準じる大学に進学するモチベーションを高めた要因には、文官高等試験（高文）への挑戦があったことが挙げられる。【表5-1】に示されるように、行政・司法・外交の各科に及第した朝鮮人の帝学士（東京商大を含む）の数を見れば、東京・京都ではおおむね拮抗しているか、あるいはやや京都の方が上回っていることが分かる。

また、九州帝大の法科（農学部からの合格者も存在する）も、いきおい競争試験では不利になりがちな地方都市に存在しているとは言え、数的には健闘していると言ってよい。高文の合格者中、東北帝大と九州帝大には「傍系」組の入学者も多く、東北の

【表5-1】文官高等試験の合格者（大学別）

	行政科	司法科	外交科
東京帝大	16	12	1
京都帝大	17	13	
東北帝大	6	5	
九州帝大	11	8	
東京商大	4	2	

註）数字は延べ人数であり行政・司法の両科合格者は12名を数える。

場合は11名中の7名（約64%）、九州の場合は19名中の実に17名（約89%）までが傍系入学者である。

出身校としては旧韓国時代の法官養成所に起源を持つ官立の京城法学専門学校出身者が相対的に多く（東北：3、九州：6）、九州帝大の場合は同じく官立の京城高等商業学校（旧東洋協会専門学校京城分校）出身者も3名を数える。ちなみに、1965年に日韓基本条約が締結された際、韓国側の外相を務めていた金東祚（1918-2004）は、まさに京城高商から九州帝大法科に進み、1943年秋の高文・行政科に合格した人物であった。当時の受験界や官界においてはこうした「傍系」帝大出身者が高文に合格するというルートが確かに認識されていたのである。

\*

ただし、【表5-2】に見えるように、やはりここにも「西北人」「湖南人」「嶺南人」というフィルターを被せてみれば、我々の眼前には本稿が繰り返し拘ってきた別の風景が広がることになろう。すなわち、平安南道・咸鏡南道・全羅南道からの合格者数は、人口比からしても、京畿道出身者に全くひけをとらない。むしろ、人口比例上は凌駕しているとさえ言ってい。もしかすれば、日本統治下の朝鮮における地域社会とは、現代の人間が考える以上に多様な価値観を有しつつ、しかもかなりの流動性を許容する生活空間であったとさえ言えよう。

また、本稿では明らかにするに至っていないものの、「満洲帝国高等文官試験（満洲高文）」への合格者や大同学院への入学者も後掲のリストに散見される。その実数については未解明であるゆえ、ここでは朝鮮人学徒の目が必ずしも日本内地にだけ向いていたわけではないことのみを指摘するに止めたい。

【表5-2】文官高等試験の合格者（出身地域別）

	東京帝大		京都帝大		東北帝大		九州帝大		東京商大		(小計)
	行政科	司法科	行政科	司法科	行政科	司法科	行政科	司法科	行政科	司法科	
咸鏡北道											
咸鏡南道	1	1			1	1	3	2	2	1	12
黄海道								1			1
平安北道	1	2	2	2							7
平安南道	2		4	3	1	1		1	1		13
江原道											
京畿道	3	2	3	2	3		1	1	1		16
忠清北道	1					1					2
忠清南道			3	1			1				5
全羅北道	2				1	1	1	1			6
全羅南道	4	2	2	2		1	1	1			13
慶尚北道		3	2	1			2	1			8
慶尚南道	2	1	1	2			2			1	9
(不明)		1	1								2
(小計)	16	12	18	13	6	5	11	8	4	2	94

註) 出身地域が未詳の場合でも、出身高普（中学）が判明している時はその所在地の出身者として算入した。

## 博士学位の取得

『日本博士録』（教育行政研究所、1956年5月）および『在日韓国留學生 博士録』（在日本韓国留學生会、1978年8月）などを元に確認したところ、1924年以降、大学制度が新制<sup>16)</sup>に切り替わる1950年以前に博士学位を取得した朝鮮人の総数は338であり、そのうち約97%にあたる328人は医学博士であった。なお、理学博士は3、工学博士は1、農学博士は5、そして薬学博士は1であった。

朝鮮人医博の第1号は京城医学専門学校出身の尹治衡であり、1924年7月に九州帝国大学より授与されている。【表6】と【表7】に見える通り、以降、各帝大・官立医大が中心となって医学博士の授与が行われている。まず目を惹くのは京城帝大におけるその授与数の突出ぶりである。ただし、注意すべきはその約半数は「解放」後の授与である点である<sup>17)</sup>。同様の現象は台北帝大や満洲医大でも見られ、「ポツダム博士」と揶揄されるもする駆け込みの学位授与が行われ、そしてその中には多数の旧外地出身者も含まれていた。

16) もちろん、当面の間は新制大学に旧制大学が併置される形で存続しており、旧学位令による審査と授与はしばらく続いていた。

なお、彼らの多く、そして彼女<sup>18)</sup>らの全員は「非学士」であった。つまり、医学専門学校を卒業して医師資格を保有しつつも、大学医学部・医科大学を卒業した「医学士」ではなかった。だからこそなのか、単なる「箔付け」以上に帝大での医学博士の取得を熱望していた。

特に、官立の京城医学専門学校と私立のセブランス連合医学専門学校（1943-45は旭医専）の関係もそうした博士学位の獲得において、その競合を後押しした面があったことが推測される。さらに数的には両校に劣るものの、公立の平壤医学専門学校出身者も他の医専の中ではかなり健闘<sup>19)</sup>していると言ってよい。

京城医専は1899年に設立された官立京城医学校の系譜を引き、1907年設立の大韓医院・医育部を前身

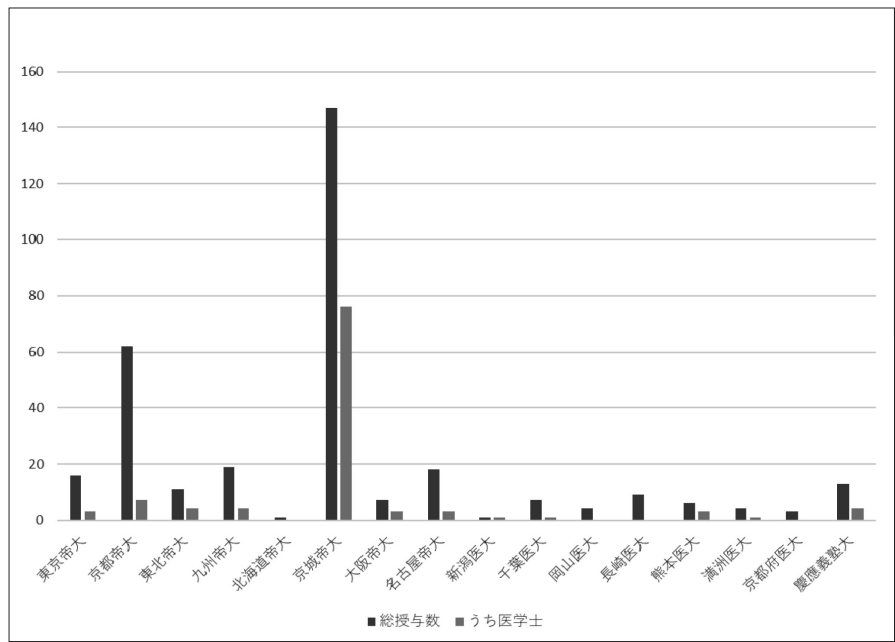
17) 通堂あゆみ氏による一連の論考（「博士学位授与機能から考察する京城帝国大学医学部の『教室』」〔九州史学〕167、2014年3月）、「京城帝国大学医学部における一九四五年八月一五日以降の博士学位認定について」〔朝鮮学報〕234、2015年1月）、「医師免許保有者の国内移動と京城帝国大学：専攻生制度に注目して」〔史潮〕新81、2017年6月）をまずは参照されたい。

18) 東京女子医学専門学校（現・東京女子医科大学）出身者、および帝国女子医学専門学校（現・東邦大学医学部）出身者からそれぞれ2名ずつ、都合4名の朝鮮人女性医師に京城帝大から医学博士の学位が授与されている。



【表6】医学博士の授与数（大学別）

	総数	うち医学士
東京帝大	16	3
京都帝大	62	7
東北帝大	11	4
九州帝大	19	4
北海道帝大	1	0
京城帝大	147	76
大阪帝大	7	3
名古屋帝大	18	3
新潟医大	1	1
千葉医大	7	1
岡山医大	4	0
長崎医大	9	0
熊本医大	6	3
満洲医大	4	1
京都府医大	3	0
慶應義塾大	13	4
(小計)	328	110



【表7】医学専門学校出身者への医学博士授与数（大学別）

	京城医専	セブランス医専	平壤医専	大邱医専	その他の医専	(小計)
東京帝大	4	6	1		1	12
京都帝大	20	29	2	2	1	54
東北帝大	3	2	1			6
九州帝大	5	3	2	3	1	14
北海道帝大	1					1
京城帝大	40	5	13	1	8	67
大阪帝大	1	2			1	4
名古屋帝大	5	5	1	2	2	15
千葉医大	1	2	2		1	6
岡山医大		4				4
長崎医大	3		3	2	1	9
熊本医大	2		1			3
満洲医大	2				1	3
京都府医大		3				3
慶應義塾大	6	1			1	8
(小計)	93	62	26	10	18	209

とする朝鮮医界の老舗であり、併合後は朝鮮総督府  
 医院となり、その併設医専となった。京城帝大医学

部が開設される以前には単独での医科大学昇格もし  
 ばしば取り沙汰されていたものの、朝鮮総督府医院  
 は京城帝大の附属病院に転換されている。院長の志  
 賀潔が京城帝大教授として初代の医学部長を兼補し  
 たように、当初は京城医専と京城帝大医学部を兼任  
 する教員が多かった。「解放」後にはやはり単科の  
 医大として自立することを望んだものの、米軍政の  
 「国大案」に押し切られ、ソウル大学校医科大学の  
 「専門部」となり、医専時代の入学者が卒業期を迎

19) 九州帝大医学部を卒業後に平壤医専教授(1931-37)とな  
 った遠城寺宗徳(小児科医、元九州大学総長)によれば、「医  
 専は一クラス七十人、朝鮮の人と日本人が半分ずつだった。  
 朝鮮の人たちは、厳しい試験をパスしただけに優秀な人が多  
 かったが、日本人の成績は余りよくなく、クラスで上位を占  
 めるのは朝鮮の学生たち、日本人は二人もおればよいほう。」  
 (遠城寺宗徳「聞き書きシリーズ 一生一竿」⑩/『西日本新聞』  
 1978年9月7日付朝刊5面) という状況であったという。

【表8】各帝大医学部に入学した者の出身道（一部推定を含む）

	咸北	咸南	平北	平南	黄海	江原	京畿	忠北	忠南	全北	全南	慶北	慶南
東京帝大	1	2	2	2			1						
京都帝大	2	4		7	1		4		1	1	3	2	3
東北帝大	2	2		2	1		1						
九州帝大	2	2	1	1			2	1			1		
(小計)	7	10	3	12	2		8	1	1	1	4	2	3

註) 出身道が不明の場合でも、出身中が判明している場合には学校所在地の出身として算入した。

えた時点で廃止された。

また、セブランス医専は1885年4月に作られた王立の医療施設（済衆院）を淵源とするキリスト教宣教師が経営を行った伝統ある医学校であり、1917年3月から朝鮮教育令によって専門学校令に基づく医学専門学校として朝鮮総督から認可を受けた。1946年にはセブランス医科大学となり、また1957年に延禧大学校（旧延禧専門学校）と統合し、改めて延世大学校医科大学となり現在に至る。

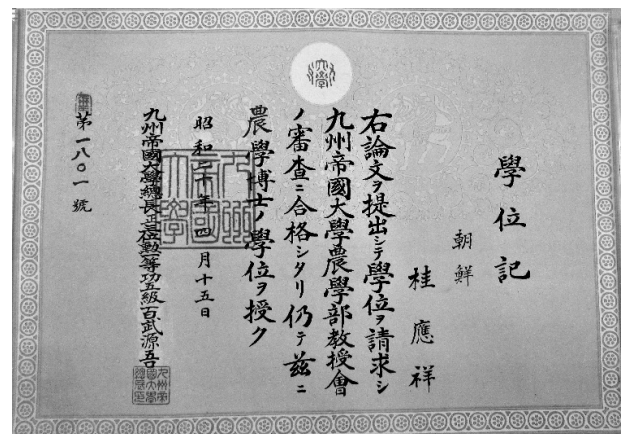
ともあれ、京城医専出身の医師が京城帝大医学部で学位の審査を希望することはすぐれて自然な流れであったと言えよう。他方、セブランス医専出身者が積極的に内地の大学、とりわけ京都帝大医学部において学位の取得を目指していたことと好対照をなしている。これは岡山の六高から京都帝大医学部に進み、卒業後はセブランス医専教授となり、医学博士も京都帝大から授与されていた尹日善の存在が大きかったのは事実である。

ただ、ここで三たび「出身地」「出身中」の問題に拘ってみたい。とは言え、現段階では医専を卒業した学位取得者の出身地については調査未了である。それでも【表8】に見えるように、帝大医学部への入学者の動向を追えば、医師の養成においても明らかに「以北五道」出身者の数が優勢であることは一目瞭然である。もし、こうした傾向が医専出身者にも敷衍できることが証明できれば、「西北人」医師が積極的に内地にまで出向いて医学博士の学位を取得しようとしたということになり、本稿における「西北人」にまつわる仮説がさらに強化されることになる。

## おわりに

小文を締めくくるにあたって、ある「学位記」の写影<sup>20)</sup>を掲載しておきたい。この学位記には平安北道の定州に生まれ、上田蚕糸専門学校を経て九州帝国大学農学部を1925年7月に卒業した桂應祥に1945（昭和20）年4月15日付けで農学博士が授与されたことが記されている。桂の学位請求論文の題は「家蚕の繭色及卵形の遺伝に関する研究」であった。

桂應祥は「解放」後には北朝鮮に移り、金日成大学農学部の教授や中央蚕業試験場長、そして科学院・農業科学研究所長などを歴任した。なお、金日成大学（金日成総合大学）農学部は1959年に黄海北道の沙里院農業大学として分離し、桂は蚕学部長を務めた<sup>21)</sup>。そして、同大学は1990年には彼の名を冠した「桂應祥沙里院農業大学」と改称され、今日に至る



20) この学位記は現在、九州大学大学文書館にて保管されている。学位記が入った紙製の円筒容器を収納する木箱の外書きには宛名とともに送り先として「朝鮮京畿道水原郡水原邑高等町一五六ノ一」と墨書され、書留小包で郵送されたものの、宛先不明であったのか送り元に返送されたものであると推測される（撮影と掲載を許可していただいた大学文書館教授・副館長の藤岡健太郎氏に篤く御礼を申し上げます）。

ている。

こうした帝国大学での修学や学位取得に関しては、今更かの地では一顧だにされないかも知れない。しかし、「傍系」として帝国大学に入学して以来、学士の称号を得て、さらに博士学位まで授与された桂應祥の「学歴」こそは、本稿の姓名一覧でその名を列記した延べにして1,000名を超える朝鮮半島出身者たちが抱いたある種の理想形であり、完成形でもあった。だからこそ、1965年の日韓国交正常化以前においても、母校をはじめとする日本の大学に学位請求を行う、とりわけ理科系の韓国人研究者が後を絶たなかったのである。

\*

さて、日本内地の大学に学び、さらに「解放」後にもそれを引きずった韓国・朝鮮人たちは、「日帝」の遺制や遺産に寄り掛かった、無自覚で権威主義的なエリートであった、という批判的な評価はある意味で容易に行えよう。筆者としては「否」であると言いつけたいものの、どうしても歯切れの悪さが付

きまとう。それでも、「大韓民国」と「朝鮮民主主義人民共和国」それぞれの国家が成立する過程の其処彼処には、「帝国」の大学で学んだ者たちが職分に応じて様々に介在している姿が確認できるとは言える。理工系においてはなおさらそれが顕著であった。

また、韓国や北朝鮮においては、中国東北部や台湾などで頻繁に見られた日本人技術者の「留用」が一部の例外<sup>22)</sup>を除けば殆ど行われていないという事実がある。絶対数は不足していたとしても、ともすれば日本人の手を借りずとも、米軍政やソ連軍の介添えの下、ある程度の自立が建国当初より可能であったとは言えまいか。やはり、「帝国の大学に学んだ」者たちの存在こそは、韓国と北朝鮮それぞれの成り立ちにまつわる物語のまさに「前走」部分を織りなしている存在なのであった。

[付記] 本稿はJSPS 科研費（課題番号：19KK004）の成果の一部である。

21) 「放浪の科学者・桂應祥博士」（任正嫻〔責任編集〕『現代朝鮮の科学者たち』彩流社、1997年2月、同書20-30頁）。

22) 木村光彦・安部桂司『北朝鮮の軍事工業化 帝国の戦争から金日成の戦争へ』（知泉書館、2003年8月）。また、例外的に南北ともに留用を強いられた考古学者に関しては、小泉顕夫『朝鮮古代遺跡の遍歴』（六興出版、1986年2月）と、有光教一『朝鮮考古学七十五年』（昭和堂、2007年3月）によって、その任用のあり方を知ることができる。

# **Korean students who attended universities in the “Empire”**

**Hiroki NAGASHIMA**

## **Abstract**

What did the Empire of Japan want from the Koreans? What did it take from them? What did it give them? Conversely, what did Korean students want in return? One of the most prominent answers to this question is “educational background.” This was not a search for or condemnation of “pro-Japanese” groups nor an attempt to identify “patriots.” It was an honest attempt to track the formation and evolution of “academic background” in the contemporary Korean society.

This paper aims to list all Korean students who attended Imperial University or its equivalent, as far as can be ascertained, including those who were forced to join the army during their studies.